

Use and Management of Marine Resources in Inuit Society of Canada : Beluga Whale Resources in Nunavik

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5783

カナダ・イヌイト社会における海洋資源の利用と管理：ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合*

岸 上 伸 啓

(1) 問題の所在

資源とは、ある目的に利用されるもととなる物資や人材、情報、知識を意味する(岸上 1999a:64)。資源の有用性や経済的な価値は文化や時代、地域ごとに異なる(秋道 1997)。ある地域や時代の人間集団にとって有用な資源であっても、別の地域や時代ではそうでない場合がある。例えば、かつて欧米の主流社会の人々にとってクジラ(の髭や鯨油)は産業用資源であったが、現在では自然のシンボルであり(Peterson 1993)、保護すべき対象である。一方、北米の極北先住民や日本人にとってはクジラは食料資源であるのみならず、重要な社会・文化的な資源である(Freeman et al. 1998:19-57 ; Iwasaki-Goodman and Freeman 1994)。

資源の利用や開発についても利用者間に差異が見られ、無計画な略奪的な資源開発は地球環境に悪影響を及ぼすことがある。フィリピンにおける森林資源は、政府、私企業、地域住人など政治経済力に格差のある複数の集団によって重層的に利用されている(葉山 1999)。このような場合には、国家の中に組み込まれている先住民は社会の少数派として他の利用者から見ると不利であることが多い。さらに外部からの一方的な資源の開発は、資源自体の枯渇化のみならず、先住民が生活の場となる環境そのものの破壊につながることが多い。また、フィリピン南部地域の漁民による生活のためのダイナマイト漁には、自らの環境や漁業資源を破壊してしまうという一面がある(赤嶺 1999)。政治経済的に弱者の立場にある少数派先住民や地域住民による資源の利用と管理のあり方が、それ以外の人々の資源開発や利用と共存できうるような方策が模索されるべきである。

資源問題に関する文化人類学的研究(資源人類学と呼んでおきたい)の目的のひとつは、地球環境を破壊することなく、資源を人類全体が将来も持続して利用するようにしながら、先住民やその他の人々が日々の生活においてその資源を利用することを可能にするためにはどのような方策や選択肢があるかを調査し、提言することである(岸上 1999a:73)。そして資源問題を真に理解するためには、資源自体の生態的な条件とそれを利用する側の文化と社会の条件をともに研究することが不可欠である

(秋道 1999:101)。そのためには各地域におけるさまざまな資源の利用や管理の実態を現地において調査することが必要となる。

本稿ではカナダ極北地域のイヌイットが食料資源としている海棲回遊動物シロイルカに焦点を当て、シロイルカのような再生可能な海洋資源をいかに管理し、持続的に利用していくかという問題を考えてみたい。カナダ・ヌナヴィク(Nunavik)のアクリヴィク村(Akulivik)の事例を取り上げ、シロイルカ資源の利用と管理について紹介する(注1)。

(2) 資源としてのシロイルカ

北米の極北沿岸地域の海中に生息しているシロイルカは、小型のクジラであり、ベルガクジラ (beluga whale) やシロクジラ (white whale) と一般に呼ばれている。イヌイット名はヒ(キ)ラルガク (*qilalugak*) で、学名は *Delphinapterus leucas* である。シロイルカの体長はオスで約4から6メートル、メスで約4メートルである。その体重はオスで最大約1000キログラム、メスで最大約700キログラムになる(Graves and Hall 1988:26)。シロイルカは15頭あまりからなる群(グループ)を形成し、行動をともにする習性を持ち、季節的に回遊する。

大型のシロイルカ1頭あたりからは約200キログラムの肉、約50キログラムのマツタック(脂肪付き皮部)、約300リットルの油(脂肪)を取ることができる。カナダの極北沿岸に住むイヌイットは肉やマツタックを食料資源として、脂肪(油)を燃料資源として利用してきた。カナダのハドソン湾やウンガヴァ湾では1850年から1900年頃にかけてハドソン湾会社(the Hudson's Bay Company)によって数千頭にもおよぶシロイルカが鯨油を取ると言う商業目的で捕獲され、個体総数が激減したことが知られている。現在では、シロイルカの商業捕獲は行われておらず、主にイヌイットによって食料資源として利用されている。

(3) ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の管理と問題点

3-1 現状

ケベック州極北地域ヌナヴィクのイヌイットはマツタックを珍味として好み、夏から秋にかけてシロイルカを捕獲している。極北地域全体で見るとシロイルカ自体は絶滅の危機に瀕している生物種ではないが、ヌナヴィク周辺ではかつての商業捕獲のために個体数が減少しており、資源として持続的に利用するためには個体数の維持という管理が必要であると生物学者によって言われている。ヌナヴィク周辺には3つのシロイルカのグループ(東部ハドソン湾グループ、西部ハドソン湾グループ、ウンガヴァ湾グループ)が生息し、ハドソン海峡で越冬している。特に、ウンガヴァ湾のシロイルカのグループは頭数の上で危機の状態にある。

シロイルカはカナダ連邦政府の管轄下にある生物である。ヌナヴィクの陸地は行政

上、ケベック州政府の管轄下であるが、周辺の海洋や島嶼はヌナヴト準州政府や連邦政府の管轄下にある。ケベック州ヌナヴィクのクージュアラールピクの東方海上にあるベルチャー群島のサニキロアックに住むイヌイット（ヌナヴト準州所属）もヌナヴィクのイヌイット同様、ハドソン湾東岸のシロイルカ資源を捕獲、利用しているが、管理や捕獲制限について異なる規則が適用されているという問題が生じている。

資源の現状を知り、過剰捕獲を阻止し、かつイヌイットが資源をより公正に利用できるようにするために、北ケベック・イヌイット全体を代表する政治・経済団体マキヴィク(Makivik Corporation)の資源調査部とカナダの漁業海洋省(Department of Fisheries and Oceans, D.F.O)の職員、イヌイットのハンターはウンガヴァ湾とハドソン湾東岸でシロイルカに関する調査を行ってきた。ヌナヴィク周辺のシロイルカの個体数、移動経路、生息海域、出産場所、習性などを把握するために、シロイルカの生態に係わる民俗知識についてハンターからの聞き取り調査、頭数や群についての航空機を用いた調査、陸地からの定点観察、遺伝子分析(注2)、地域移動に関する遠距離計測器を利用した調査などが約20年前から実施されてきた。

現在、ヌナヴィクのイヌイットはマキヴィクとカティヴィク地域政府(Kativik Regional Government=ヌナヴィク地域の地方自治体)を通して、そして漁業海洋省の協力を得て、シロイルカの個体数の減少を防止しようとしている。また、マキヴィクはヌナヴト準州政府とシロイルカについて相互狩猟権(reciprocal hunting rights)について話し合いをすすめている。

近年、極北地域ではコンデンサーやトランスなどさまざまな電気機器に使用されているPCB、殺虫剤・農薬に含まれるDDT、水銀など残留性有機汚染物質(POPs)による環境汚染が問題になっている(Nuttall 1998; 井口 1998:10-11; McGinn 2000:145-146)。高緯度地域では日照時間が6ヶ月に満たず、厳寒のために分解や代謝作用が遅いので残留性有機汚染物質は滞留期間が長い。そしてそれらの物質は食物連鎖を通して魚や海棲哺乳類など海洋生物の体内に高濃縮されてしまう。例えば、マツタックの一口分には1週間の許容を越すと考えられるPCBが含まれていることがあると言う。また、イヌイットの女性の母乳からカナダ南部に住む女性の母乳の2倍から10倍の高濃度のPCBが検出されている(McGinn 2000:146)。イヌイットは地元にある食料資源を食べることによって、健康上の問題に直面することになる(Ayotte, et al. 1995; Barrie et.al. 1992; Dewailly et al. 1994; Egede 1995; Kinloch et. al. 1992; Kuhnlein 1995; O'Neil et al 1997; Wormorth 1995) (注3)。このため1990年代に入り、マキヴィクの調査部ではクージュアックに調査センターをつくり、動物資源の安全性の検査を実施しはじめた。

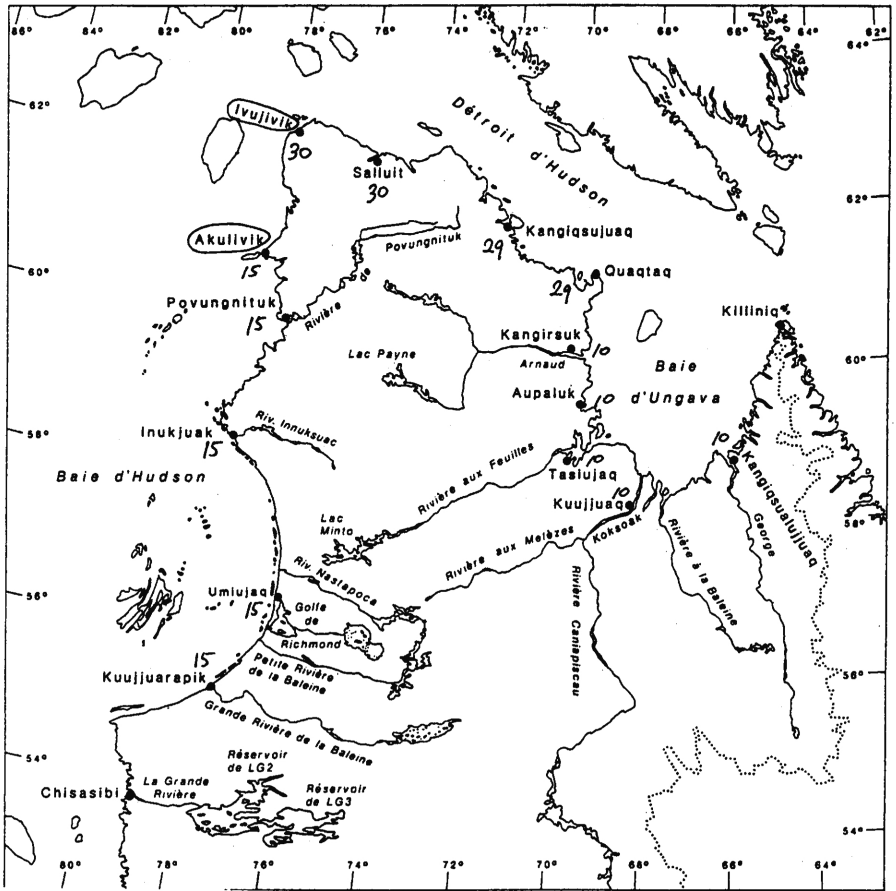
3-2 ヌナヴィクにおけるシロイルカの資源管理について

ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の管理は、政府関係者と資源利用者であるイヌイットの共同管理(co-management)の一種である。イヌイットの側にイニシアティ

ヴがある点がこの共同管理の特徴である。ここではシロイルカ資源の管理の現状について報告をする。

3-2-1 捕獲頭数の割り当て制

ヌナヴィクではシロイルカは1996年から2000年の春まで5年間、管理計画のもとにある。マキヴィクと漁業海洋省は1年間で総計約240頭まで捕獲可という試算のもと、ヌナヴィクの村役場、狩猟漁労ワナ猟協会 (HFTA) (注4)、地元のハンターと話し合い、各村ごとの年間捕獲クォータを決定した。ヌナヴィク地域の村ごとの捕獲割り当て頭数は、表1の通りである (地図1参照)。



地図1 ヌナヴィク村名とシロイルカ年間捕獲割り当て頭数(1999年10月1日現在)

村名	捕獲割り当て頭数
クージュアラピーク	15頭
ウミウヤック	15頭
イヌクジュアク	15頭
プヴンニツック	15頭
アクリヴィク	15頭
イヴィヴィク	30頭
サルイト	30頭
カンギスジュアック	29頭
クアタック	29頭
カンギスク	10頭
アウパルク	10頭
タシウヤック	10頭
クージュアック	10頭
カンギスアルジュアック	10頭

表1 ヌナヴィク地域における村別の年間シロイルカ捕獲割り当て頭数
(1999年10月1日現在)

1999年の時点では調査地アクリヴィク村への割り当て頭数は15頭であった。なお、この捕獲割り当て頭数は一種の内規ないしは目標であり、州や国による法的な制裁を伴うものではない点を強調しておきたい。ハドソン湾側の各村において捕獲割り当て頭数に達した後は、7月以降はイヌクジュアク村以北の沿岸海域で捕獲しなければならないと決められている。

3-2-2 シロイルカの禁猟区の設定と禁止・警告事項

マキヴィクの調査部による調査をもとに、ヌナヴィクの沿岸地域にシロイルカの禁猟区が設定された。

ウンガヴァ湾のマカリク川(Mucalic River)の河口はシロイルカの幼獣が成育する場所であるので、捕獲は全面的に禁止されている。さらにウンガヴァ湾ではクアタック村より以北の海域でシロイルカを捕獲しなければならないと決められている。ハドソン湾のナスタプカ川(Nastapoka)の河口はシロイルカの幼獣が成育する場所であるので、狩猟禁止期間が設定されている。

また、禁止事項としてシロイルカの幼獣は取ってはならないとされている。さらに海獣は年を経るごとにPCBや水銀を体内に蓄積していくので、シロイルカの老獣はなるべく食べないようにとの警告がマキヴィクの調査部から出されている。

(4) シロイルカの捕獲と分配：1999年10月のアクリヴィク村の事例

カナダ極北地域の先住民社会では1960年代以降、パン、缶詰食品、乾燥食品などが大量にカナダ南部から運搬され、消費されるようになってきた。食料消費のパターンは、カナダのキーワティン地域やヌナヴィク地域で実施された調査が示すように、若い世代のイヌイットの間では店で購入する食料品への依存度が高まり、狩猟や漁労への依存度が低下してきている(Thouez et. al. 1989; Moffatt et.al. 1994)。しかしながら全体的な傾向として陸海獣の肉や魚を中心とする伝統食(カントリー・フード)はイヌイットの主食であり続けている(Sante Quebec 1995; Wein et. al. 1996)。

現在のアクリヴィク村においては、その周辺地域に生息しているワモンアザラシ、アゴヒゲアザラシ、シロイルカ、セイウチ、ホッキョクグマ、カリブー、ホッキョクイワナ、コクチマス、陸封性ホッキョクイワナ、ホワイト・フィッシュ、ライチョウ、カナダ・ギース、スノー・ギース、カモ、鳥の卵、野イチゴ類、ウニ、海草類など動植物を食料資源として利用している。この中でシロイルカ、アゴヒゲアザラシ、セイウチ、ホッキョクグマ、カリブーは相対的に大型獣であるため、その肉やその他の部分は他のハンターや多数の村人に分配される。

アクリヴィク村のイヌイットの間では地元の生協で購入する食料品が食事の中にしめる比重が増大してきているが、アザラシの肉、カリブーの肉、ホッキョクイワナなど伝統食が中心的な食料であると言える(岸上 1999b)。アクリヴィク村では、他のイヌイットの村同様、シロイルカのマッタックは美味なる食料として珍重されており、イヌイットが好んで入手しようとする伝統食のひとつである。アクリヴィク村における生業の年周期は表2に要約する通りである。

主な捕獲対象物	月(1年)											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ホッキョクイワナ	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○	○	○	○
陸封性ホッキョクイワナ	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎
ホワイトフィッシュ	◎	◎	○	○	○	○				○	◎	◎
ワモンアザラシ	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	○	◎	○	○
アゴヒゲアザラシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	○	○
シロイルカ						○	○	○	○	◎		
セイウチ										◎		
ホッキョクグマ	◎	◎	○	○	○	○	○				◎	◎
カリブー	◎	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○
スノー・ギース						○	○	○	○			

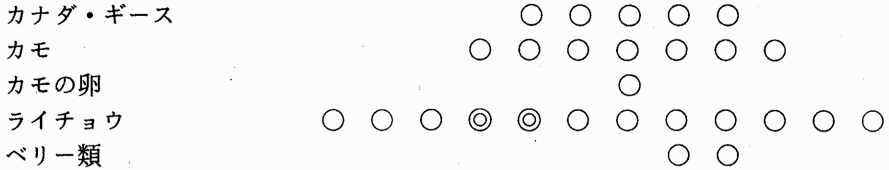


表2 アクリヴィク村の狩猟・漁労活動の1年(1999年現在)

(注) 網掛けは中心的な捕獲物(食料)を示す。○は捕獲期、◎は捕獲の最盛期を示す。

アクリヴィク村周辺では6月から10月にかけてシロイルカがケープ・スミス島の近くを回遊する。特に10月頃には南から北上する群がアクリヴィク村周辺を通過する。また、同時期には北方に180キロあまり離れたイヴィヴィク村付近の海域に多数のシロイルカが越冬のために集合する。

アクリヴィク村のイヌイットによるシロイルカの捕獲には、個々のハンターが20から40馬力の船外機付き小型ボート(全長約4メートル)を利用して行う狩猟と大型ボート(全長約12メートル)を利用して行う狩猟の2種類がある。前者ではアクリヴィク村の近くにあるケープ・スミス島の周辺で、後者の場合にはイヴィヴィク村の周辺で狩猟が行われる(注5)。アクリヴィク村には1999年の時点で大型ボートが3隻あり、1隻は村が所有し、2隻は私有である。獲物の分配には、捕獲量や捕獲者(主体)によって違いが見られた。

ここではケベック州ヌナヴィクのハドソン湾側にあるアクリヴィク村のハンターによる1999年10月のシロイルカ猟と獲物の分配を紹介する。

4-1 船外機付き小型ボートを利用するシロイルカの捕獲と分配

4-1-1 捕獲方法

ハンター1人から3人が1組になる。船外機付き小型ボートで出猟する場合には小型ボートは単独で村を出るが、多くの場合、狩猟場で他のボート数隻と合流する。ケープ・スミス島の南側の中央部には小高い丘があり、海を見渡することができる。アクリヴィク村のハンターたちはその丘にのぼり、双眼鏡を利用してこの季節に北上してくるシロイルカの群を発見しようとする。

シロイルカが陸の近くを回遊している場合には、丘の上からライフルでしとめることがある。しかし、多くの場合は、発見後、小型ボートでシロイルカを追跡する。シロイルカは危険を感じると、浅瀬に逃げ込んだり、陸や断崖の水際に接近する習性を持っている。この習性を利用してハンターは発見したシロイルカを浅瀬か陸地の方へと追い込み、十分に近づいた後、ライフルをうってから、大きな浮き(現在はプラスチック製石油缶)にひもによって連結されている離頭鉞を打ち込む。時々、鉞を打ち

込んだ後にライフルで殺すこともある。この狩猟には銚を獲物に打ち込むというハンターでしか味わうことのできない心を躍らせるような醍醐味がある。傷ついたシロイルカは逃げるが、浮きがついているので海底に没することはない。シロイルカが死ぬと、それを近くの浜辺か磯へ小型ボートで曳航し、そこで解体をする。マツタックや肉は通常、その日のうちに村に持ち帰られる。10月にはアクリヴィク村のハンターは、朝9時頃に村を出て、日没後（5時30時頃以降）に村へ帰ってくる（注6）。

ここでは4事例を報告しておく。

事例1

1999年10月14日（木曜日）には、3艘の船外機付き小型ボートがケープ・スミス島の南側へ出猟したが、シロイルカを捕獲できなかった。小型ボートの1艘には2人が、それ以外には3人ずつが乗り込んでいた。1艘目にはイヌイット1人と筆者が、2艘目には中年のイヌイット3人が乗っていた。この2艘は朝、アクリヴィク村を同時に出発し、夕方村に帰り着くまで行動をとらせた。3艘目には隣村のプヴンニツク村から来た3人の中年ハンターが乗り込んでいた。彼らは3週間ほど前からシロイルカを捕獲するためにケープ・スミス島でキャンプを行っていた。これら3艘の小型ボートは狩猟場で合流し、合同でシロイルカの到来を見張ったが、1頭も発見できなかった。

事例2

1999年10月16日（土曜日）には、休日であったためにいつもより多い8組のハンターがケープ・スミス島の南側へシロイルカを取りに出猟し、6頭のシロイルカを捕獲した。8組のうち1組はプヴンニツク村から来た若いハンター3人（事例1とは異なるグループ）であった。

獲物はケープ・スミス島の浜辺に運ばれ、狩猟に参加した古老の指示に従って解体が行われた。アクリヴィク村のハンターは、1頭分をプヴンニツク村から来たハンター3人に贈呈した。残りの5頭を猟に参加した村のハンターが必要に応じて自分の分を取り、一部はケープ・スミス島に貯蔵した。捕獲したハンターは自分の取り分と残りを小型ボートに積み、アクリヴィク村へ帰った。

船外機付きボートはアクリヴィク村に近づくと、ライフルを空に向かって連射し、村人にシロイルカのマツタックと肉を持ち帰ったことを知らせた。そのライフル音を聞いた村人はビニール袋を持参し、浜辺の小型ボート置き場へと集まってくる。シロイルカを捕獲したハンターは、厚さ2センチメートルあまり、縦横30センチメートル×60センチメートルあまりの大きさのマツタックを1枚ずつ村人へ手渡す。私の下宿先の主婦も1枚もらってきた。この1枚は大人4人と子供4人からなる下宿世帯において2食分になった。

事例3

1999年10月19日（火曜日）には、4組のハンターが船外機付き小型ボートで出猟し、

午後5時過ぎにシロイルカを1頭しとめたが、暗くなったため、解体せず、場所を特定するために赤色のプラスチック製石油缶を目印として付け、ケープ・スミス島の近くの海中にロープで係留してきた。このシロイルカはプヴンニツク村から来た若者の1人が生まれてはじめて捕獲したものであった(注7)。このシロイルカのマツタックと肉は、アクリヴィク村のイヌイットに分配された後、大半がプヴンニツク村へと持ち帰られた。

事例4

1999年10月23日(土曜日)には、出猟した中で2組のハンターが6頭のシロイルカを捕獲し、2頭をケープ・スミス島に残し、4頭をハンター間で分配した後、残りを村に持ち帰った。捕獲したハンターは村の浜辺に集まった40人以上の村人に1、2枚ずつマツタックを分配した。

4-1-2 獲物の分配

シロイルカは群をなすため、事例2と4のように1999年10月には1度に6頭程度捕獲されることがあった。シロイルカをしとめた人、その猟に参加したハンター、解体現場に遭遇した人たちが解体を行い、まず、各自の必要に応じてマツタックや肉を取った。これは第一次分配である。

ハンターたちはそれからマツタックや肉をボートに積んで村に帰った。村の前浜に到着する3分くらい前から小型ボート上で彼らはライフルを空に向かって連射し、シロイルカを持ち帰ったことを村人に知らせた。また、ハンターないしはその妻が、ハンターたちの帰村直後にFMラジオ局へ電話をかけ、シロイルカのマツタックが欲しい人は小型ボート置き場のある浜辺まで取りに来るようにと村全体へ放送することがあった。

合図やラジオ放送を聞いた村人は三々五々にビニール袋を手にして小型ボートの所に集まった。2頭以上取れた場合には、ハンターたちは、一人につき縦約60センチメートル、横約30センチメートル、厚さ約2センチメートルのマツタックを1、2枚づつもらいに来た村人に手渡した。このようにしてすべてではないが、村人に獲物が分配された。これが二次分配である。

さらにこの狩猟に参加したハンターは、親兄弟、祖父母、子どもたちなど近親族(restricted *ilagii*)にマツタックや肉を分配した後、残った肉とマツタックを自宅の冷凍機に保存した。狩猟後数日は、おもに親戚や近所の者がハンターの家を訪れ、食事に参加することによって再度、分配が行われた。さらに、浜辺で肉やマツタックを入手できなかった村人や親戚の者がそれらをハンターの家にもらいに来ていた。また、ハンター自らは人に託して、シロイルカのマツタックをモントリオールで勉強しているイトコに届けたり(事例2の場合)、隣村に住むオジやオバに届けたりすることも行われていた。

このようにハンターたちが個人で捕獲したシロイルカの肉やマツタックは、親族や

近所の者を中心に分配され、最終的には多数の村人の口にはいることになる。さらに分配を受けた村人の中には、マッタックをプヴンニツク村やイヌクジュアク村を訪れる村人に託して、そこに住む親戚の者に贈呈していた。

4-2 ハンター・サポート・プログラムを利用した村有大型ボートによるシロイルカの捕獲と分配

4-2-1 村有大型ボートによるシロイルカの捕獲

村は毎年10月頃にハンター・サポート・プログラム（注8）を利用して6人のハンターをイヴィヴィク村付近の狩猟場へと派遣し、村人のためにシロイルカを捕獲させる。アクリヴィク村には村有大型ボートが1隻ある。その大型ボートの船長と副船長2人は固定であるが、残りの4人については公募をした後、定員以上の参加希望者がいる場合には、村会議員と船長が相談して決める。1999年の参加者の年代と報酬（日当の合計）は次の通りであった。

	年齢	日当の合計
船長	40歳代半ば	\$1550
副船長	40歳代半ば	\$1200
船員	60歳代後半	不明（途中で抜ける）
	40歳代半ば	\$375（途中で抜ける）
	10歳代後半	\$1275
	10歳代後半	\$1230
	10歳代後半	\$300（途中から参加）

近年はイヴィヴィク村方面へ出猟しているが、その際には村有の大型ボートに船外機付き小型ボート1艘を搭載して行く。出猟中は狩猟場の近くか、イヴィヴィク村の沖に停泊する大型ボートで夜を過ごす。狩猟方法は、基本的には5-1と同じであるが、大型ボートもシロイルカの追跡に利用する。

出猟期間中、参加したハンターには日当が支払われる他、大型ボートの燃料やハンターの食料、銃弾などが支給される。船長は通常、村全体に分配するのに十分なシロイルカを捕獲するまで狩猟地に滞在するが、10頭程度捕獲できれば村に帰る。

1999年の10月10日から10月27日まで村に雇われたハンターは村有大型ボートを利用してシロイルカ猟に出猟した。そして15頭のシロイルカを捕獲し、村に持ち帰った。7人のハンターには参加した日数に応じて給料が支払われたほか、最後まで狩猟に従事した5人には欲しい部位のマッタックや肉を取ることが許された。そして残りのマッタックや肉は村人へと無料で分配された。

4-2-2 村有大型ボート捕獲のシロイルカの分配

10月28日の午後1:30すぎに大型ボートから浜辺にシロイルカのマッタック、頭部、肉が運ばれ始めた。さらに私有大型ボート（1号）の船長から7頭分のシロイルカのマッタックと肉が村へ寄付された。ハンター・サポート・プログラムを利用したシロ

イルカ猟ではマツタックを全世帯に平等分配することが原則とされているので、村役場の係りから指名された老人2人がマツタックを（ハンターの世帯を除いた）78世帯に平等に分ける作業を行った。

午後4:30過ぎに村人が浜辺に集まり、村長の号令の後で好きなマツタックの山を取り、持参したプラスチック袋かプラスチック箱に入れて自宅に持って帰った。分配場所に取りに来ることができない老人や寡婦の世帯には村から委託された人がスノーモービルやトラックでマツタックを配達した。シロイルカの頭部や肉の部分は欲しい人が取っていくことが許されていた。世帯の規模によって差があるが、1世帯あたりマツタックだけでも10から30キログラムを入手した。余った肉や頭部は村有の冷凍庫に納められ、将来、欲しい人が取りに行ってもよいことになっていた。私の下宿先の主人は30キログラムあまりのマツタックをもらってきた。

4-3 私有大型ボートによるシロイルカの捕獲と分配

4-3-1 私有大型ボートによるシロイルカの捕獲

アクリヴィク村には私有大型ボートが2隻ある。捕獲のやり方や狩猟地は村有大型ボートの場合とほぼ同じであるが、ボートの持ち主（船長）は連れていくハンターを腕の良い者や親戚の者から選ぶ点で異なる。また、ハンターには給料は支払われないが、獲物が全体の捕獲量に応じて分配される。出猟にかかる経費は大型ボートの所有者やその親戚、同船したハンターが分担して支払うことになる。1999年の10月には2隻とも出猟した。仮にその2隻を1号と2号と呼んでおく。

事例5

1号の船長は村の中のハンターで彼の大型ボートで狩猟に行くことを希望する者の中からよく働くと考えられる者を選抜した。今年の乗組員は、船長のオイ（弟の息子）を除けば、広義の「イトコ」か友人から構成されていた。

1号は1999年10月8日から10月27日までイヴィヴィク地域へ行き、シロイルカ猟に従事した。アクリヴィク村からまず、4時間半かけてクーヴィク（Kuuvik）へ行き、そこで1泊し、カヌーで川をさかのぼって魚をとった。翌日、5時間かけてアウラティヴィク（Aulatsivik）へ行き、そこで1泊後、ディグス諸島（Digges Islands）へ向かった。ディグス諸島のサカヤーク（Sakkajjaak）がキャンプ基地である。そこには3隻の大型ボートが停泊していた。同方面にはすでにアクリヴィク村から他の2隻の大型ボートが、ブヴンニツク村から3隻大型ボートが、サルイト村から1隻の大型ボートがシロイルカ猟にきていた。

狩猟のやり方は次の通りである。

1 風が強くない日には、ハンターは朝の5時頃に起きて、無線通信機を利用して、その日の狩猟場を他の大型ボートのハンターと相談して決める。

2 2隻の大型ボートが島の周りをゆっくりと1周し、シロイルカを探す。時々島の小丘に登り、そこからシロイルカを探す。シロイルカを発見すると、船外

機付き小型ボートを海におろすとともに、ライフルや離頭銃の準備をする。

3 船外機付き小型ボートと大型ボートを利用してシロイルカを海側から島側や浅瀬へと追い込む。追いつめた後、ライフルを撃ってから離頭銃を撃つか、離頭銃を撃ってからライフルを撃つ。

4 大型ボートで獲物をキャンプ地まで運び、陸上げせずに船上で解体し、大型ボートの貯蔵庫に入れる。

5 大型ボートの貯蔵庫が獲物でいっぱいになるまで、狩猟を続ける。

大型ボート1隻につきシロイルカのマツタックや肉を50頭分くらいまで積載が可能であると言う。しかし、今年は3週間過ぎてもあまり取れなかったので12頭でやめた。

事例6 2号の場合

2号は9月末から7人で出猟したが、途中2人が抜けたために5人で捕獲した6頭のシロイルカとともに10月20日に村に帰ってきた。2号も1号同様に船長が乗組員を決定した。船員は船長とは広義の「イトコ」や「オイ」に当たるが、近親族ではなかった。乗組員のうち2人は最初の約2週間シロイルカが全く取れなかったため、イヴイヴィク村から定期航空便でアクリヴィク村に帰ってきた。このため、その2人はシロイルカの実際の捕獲には参加しなかった。シロイルカの狩猟方法は1号と同じである。

4-3-2 私有大型ボート捕獲のシロイルカの分配

1号は10月に3週間出猟し、12頭のシロイルカを捕獲した。7頭はアクリヴィク村に寄付し、5頭を乗り組んだ6人で平等に分配した。アクリヴィク村に寄付したマツタックと肉は、10月28日に村有大型ボートのものといっしょに、村人に分配された。1号の船長は2号の船長の場合とは異なり、公の場で村人に直接、獲物を分配することはなかった。

2号が捕獲したシロイルカの数は6頭であった。10月21日の午後にはアクリヴィク村北側の海岸において2号の船長とハンターが獲物を分配した。船長とハンターが大型ボートから小型ボートを利用して獲物を浜辺へ運び、獲物の肉、マツタック、頭部を海岸に敷いたビニールの上に並べた。それから船長の指示にしたがって、マツタック、肉、頭部、ひれを参加したハンターの間でほぼ平等に分配していった。それらは7つの箱に入れられ、船長（1箱分）とその親族（2箱分）、4人のハンター（各1箱分ずつ）の家へ配達された。残ったマツタックや肉は、村人に分与された。

船長はFMラジオの放送によって村人にシロイルカの分配を知らせた。その後、村人が三々五々にやってきて残されたマツタックを食べたり、船長からマツタックや肉をビニール袋へ分けてもらった。村人への分配も船長が取り仕切っていた。観察した限りでは8人の村人が直接の分配を得た。この8人は自発的に分配場所までマツタックや肉をもらいにきた村人たち（物理的に浜辺のすぐ近くに住んでいる人が多かった）であり、船長の近親族とは限らなかった。

シロイルカの頭部や肉が残ったので、ビニール・シートをかぶせ、カモメに食べられないようにした。残りの肉を村人は自由にとることができるが、私有大型ボートでの狩猟の場合、船長たちが資金を出し合ってシロイルカ猟に行ったものであり、村人はあまり獲物の分配を期待していなかったように思われる。また、船長は遠征途中で村に帰った2人のハンターにはマツタックや肉を直接的に分配しなかった。

(5) シロイルカの分配と社会的効果

5-1 伝統的なシロイルカの捕獲と分配との比較

ヌナヴィクのイヌイットが定住化する1960年代以前には、カヤック数隻でシロイルカを浅瀬に追い込み、ライフルと鉈を用いて捕獲することが一般的であった。1920年代から1950年代には、10人くらいから最大約100人が夏キャンプを構成することがあったが、シロイルカのような大型海獣はキャンプ全体で分配されることが一般的であった(岸上 1998a:78-85)。

1960年代にヌナヴィクのサルイト地域で調査を行ったグレバーンは、分配のルールを次のように指摘している(Graburn 1969:66-67)。

1 シロイルカ、セイウチ、アゴヒゲアザラシ、タテゴトアザラシなど重量が250ポンド(約115キログラム)を越す獲物はキャンプにいる人全員に何らかのやり方で分配された。

2 カリブー、ワモンアザラシ、若いアゴヒゲアザラシ、若いタテゴトアザラシのように重量が50ポンド(約23キログラム)から250ポンド(約115キログラム)までの獲物は、近親族の間でもに分配された。

3 鳥、ウサギ、卵など小さい獲物は、捕獲した人の世帯のものとなり、分配されない。

4 3でも量が多いときには、1や2のルールが適用される。

シロイルカの場合は、キャンプを構成する全世帯での分配が原則であった。このルールは現在でも、規範として存在している。しかし、1990年代後半のアクリヴィク村のように人口約400人(87世帯)の村では1頭のシロイルカを全世帯で分配するのは物理的に難しい。シロイルカが1頭しか獲れない場合は近親族の間でのみ分配される場合と、ハンターによっては20センチメートル四方のマツタックでも全世帯(現実的には欲しい世帯ないし、もらいに来る世帯)に分配することがある(注9)。

1999年のアクリヴィク村におけるシロイルカの分配は次のようであった。船外機付き小型ボートで出猟したハンターが3頭以上のシロイルカを捕獲した場合には、ハンターが小型ボート置き場にマツタックをもらいに来た人全員に対し、縦60センチメートル横30センチメートル、厚さ2センチメートルあまりのマツタックを1、2枚ずつ分与した。獲物の大半はハンターとその近親族の間で分配され、消費された。

私有の大型ボートによるシロイルカ猟では、ハンターとボート所有者の近親族には

30キログラム以上のマツタックが分配されたが、10人程度の村人が直接の分配を受けたにすぎなかった。

ハンター・サポート・プログラムによるシロイルカ猟では、村の全イヌイット世帯に10キログラムから30キログラムのマツタックが分配された。

このように捕獲頭数や捕獲主体によって分配されるマツタックや肉の分量が異なるが、ここで強調しておきたいことは、村人全員にもしくは多くの人に分配すべきであるという規範が現在でも機能していることである。

5-2 アクリヴィク村におけるシロイルカ資源の重要性

ライフル、船外機付き小型ボート、スノーモービルなどの利用によって、狩猟単位の個人化が進展してきた。それまで複数のハンターが協力して携わっていた狩猟活動が、新しい道具を利用することによって1人か2人のハンターで行うことができるようになった。このような状況の中で、船外機付き小型ボートを利用したシロイルカ猟では2人1組のハンターが単独ないしは複数組で、大型ボートを利用したシロイルカ猟やセイウチ猟では6人あまりのハンターが共同して狩猟活動に従事する数少ない狩猟である。

この共同作業によって得られた獲物については、ハンター間での分配が行われるほか、ハンターの親族や他の村人へ分配される。

船外機付き小型ボートを利用したシロイルカ猟の場合には、狩猟に参加したハンターが自分の分を取り、残りを取りに来た村人に分配する。ハンターは自分の取り分の中から親族にも獲物を分配する。この狩猟による分配では、獲物の総量が少なければ、アクリヴィク村の全世帯には分配物が届かない可能性がある。

私有大型ボートを利用したシロイルカ猟に参加したハンターたちがマツタックと肉の大半をとり、大型ボートの船長の指示によってハンターの間ではほぼ平等に分配される。ハンターに分配した後に、残った肉やマツタックを欲しい村人に船長が分配する。なお、ハンターたちは自らの取り分の中からマツタックや肉を彼らの親族に分配する。

一方、ハンター・サポート・プログラムによる村有大型ボートを利用したシロイルカ猟では、村によって派遣されたハンターが自分の分を取った後に、すべてのマツタックと肉は原則として全世帯へと分配される。

5-3 検討

すでにフリーマンら(Freeman et al. 1998)によってシロイルカ資源は極北先住民イヌイットやイヌヴィアルイトにとって食料資源として、さらに社会・文化的に重要な資源であることが指摘されているが、ここでは資源の分配に係わる社会関係に着目して検討を加えてみたい。

食料の分配には一種の相互扶助という経済的な機能がある。しかしまた、それ以外の効果もあるのである。ここで提示した事例が示すように、シロイルカのマツタックや肉は総量の多寡に関係なく、誰かと必ず分配される。さらにそれらは食事や贈り物

を通して再度、分配されていく。この分配という社会的実践によって、分配が行われるネットワークの基になる社会関係が繰り返し利用され、その関係性が再確認され、社会関係が再生産されていくのである。特に、ハンター間の関係、ハンターと彼らの親族、近所の者、友人、同名者(*sauniq*)、助産人(*sanaji*)との諸関係が食料資源の分配という実践によって再生産されている。

また、イヌイット流の獲物の分配は、相互に助け合うイヌイットという自覚と仲間意識を生み出し続ける。ハンター・サポート・プログラムによる村全体での分配では、村人意識、村全体での助け合いの規範が確認され、維持、強化されているのである。

イヌイットをめぐる政治・経済状況が大きく変化した現在、食料資源の分配という実践は、助け合いという機能のみならず、社会関係や仲間意識(イヌイット意識)の再生産と深く関連している。このように見ると、アクリヴィク村のシロイルカ猟とその獲物の分配は、経済的かつ、社会・文化的に重要な実践である。かかる理由からもイヌイットにとってシロイルカ資源を管理し、長期的な視野に立って持続的に利用していくことは重要な課題である。

(6) 結びにかえて

ここでは、カナダ・ヌナヴィク地域におけるシロイルカ資源の管理の状況とアクリヴィク村における1999年10月のシロイルカ猟とその獲物の分配について報告した。

ヌナヴィク地域においては、シロイルカのマツタックや肉はハンター間、親族や他の村人へと分配されるため、イヌイットの全世帯に行き渡っている。さらにこの分配の社会的実践は村人意識、イヌイットであること、既存の社会関係の再生産に貢献している。シロイルカ資源をイヌイットが持続的に利用することは、イヌイットの社会関係や意識の再生産にとって重要な要素のひとつであると言える。

1996年より5カ年計画でマキヴィクが中心となりシロイルカ資源の管理を実施してきた。その中心は、村ごとの捕獲頭数割り当て制の実施であった。ここではヌナヴィク地域における資源管理の問題点を整理しておきたい。

筆者の調査によると、共同管理の一端を担うシロイルカの捕獲頭数割り当て制の実施には問題がある。ヌナヴィクのイヌイットは村ごとにシロイルカの捕獲制限が課せられていることは知っているものの、個々人のハンターの狩猟行動にはほとんどその制限が反映されていない。シロイルカ資源は減少していないと主張する多くのイヌイットは、シロイルカ資源が減少しており、捕りすぎは禁物であるというマキヴィク調査部の見解や、捕獲頭数割り当て制の理由を十分には理解していないのである。また、村役場が村人のシロイルカの捕獲頭数を逐一調べているわけでもない。例えば、1年間の捕獲頭数の割り当てが15頭であるアクリヴィク村では、1999年の10月から11月にかけて少なくとも46頭が捕獲されていた。この頭数は国や州による法的な規制ではないため違法ではないが、共同管理の取り決めからみると好ましい捕獲頭数ではない。

現在の共同管理の制度を実施する場合には、資源の現状や村ごとの捕獲頭数割り当ての意義について村人に熟知してもらう必要がある。一方、資源管理を行う側（代表者）は村人の意見を十分に聞くべきである。そのためにはマキヴィクの調査部と狩猟・漁労・ワナ猟協会は各村で説明会や意見交換会を繰り返し実施し、地元からの主体的な協力を得ることが不可欠である。

シロイルカのような大型の海洋生物は広域を回遊するため、異なる地域に住むイヌイットがその同じ資源を利用することになる。第二の問題は、他の地域のイヌイット、特にヌナヴトのイヌイットとの資源利用をめぐる関係である。諸権益請求問題(land claims)がカナダ政府と4つの地域のイヌイットとの間で話し合われた結果、現在のイヌイットは北西準州、ヌナヴト、ヌナヴィク、ラブラドルの4つの行政地域に分割されており、それぞれ異なる規則が適用されている。同一の回遊海洋資源を利用している場合でもヌナヴトとヌナヴィクのイヌイットの間では異なる規制が適用されるのである。資源を地域間で適正に配分し、公平に利用するためには、相互狩猟権などヌナヴトとヌナヴィクの代表者による話し合いと取り決めが不可欠となる（注10）。同一の資源が地域外や外国の人々、企業によって開発や利用の対象になっている場合には、事情がより複雑になることはいうまでもないことであるが、当事者（利害関係者）間の対話と相互合意のみが資源開発・利用問題の解決の糸口になる。この場合、国家や地方自治体の調整者としての行政的な役割が重要となる。国家や自治体が公平性を欠く場合には、NGO組織からの監視者としての役割が重要になると言えよう。

第三の問題は、食料資源の安全性の問題である。ヌナヴィクのイヌイットは、「ジェームズ湾および北ケベック協定」（1975）の中で、カナダ政府やケベック州政府と環境保全に関して協定を締結しているが、政策としては効果的に実施されていない(Peters 1999)。近年、極北地方は汚染物質の沈殿場所であるとの指摘がなされるようになった。極北地方に熱帯や温帯地域から化学的汚染物質が海流やジェット気流によって運ばれ、それが北極海周辺に沈殿し、食物連鎖を経てPCB、DDT、水銀など有害物質が動物の体内に蓄積され、それを摂取すると人体に悪い影響が出てくる可能性がある。1980年代後半に実施された母乳調査がきっかけとなって90年代より極北地域全域において環境汚染の調査やイヌイットの健康調査が実施されるようになった。そのような成果をふまえて資源管理の対策を講じるべきである。すなわち資源の安全性という質的な側面が資源管理の上で重要になる。

動物資源の存続や安全性を左右する環境問題は、その原因をさかのぼれば熱帯や温帯地域における化学農薬や殺虫剤の利用や工業廃棄物であり、地元のイヌイットだけでは解決することが不可能であり、カナダ政府、諸外国の政府や国際連合の協力が不可欠である。極北地域の海洋資源の管理は、極北地域やカナダという国を越えた国際問題であることがわかる（注11）。

ここで見てきたように、極北地域における海洋資源を持続可能な状態で利用するた

めには、数量と安全性、公平な資源利用・分配という量的かつ質的な資源管理が必要である。さらに、極北地域における食料としての海洋資源の管理は地域内、地域間、国家と地域、国家間のさまざまなレベルのことがらに輻輳しながらかかわっており、広い視野と協力なくしては成功し得ない事業であると言えよう。そして当事者であるイヌイットだけの努力では資源・環境問題を改善したり、解決することができないことを我々は地球に住む一員として肝に銘ずるべきである（注12）。

最後に、先住民による資源の利用と管理に関する研究アプローチについて簡単に述べておきたい。本研究は問題解決の研究と言うよりも問題提起で終わってしまったが、ここで提起した資源管理の問題を今後、どのように研究すべきなのか。筆者は、近年、脚光を浴びつつある広義のポリティカル・エコロジー論(political ecology)に注目したい（注13）。

資源問題は地球環境問題と不可分な関係にあるが、後者については1980年代後半以降、人文地理学者、社会学者、文化人類学者によってポリティカル・エコロジー論の視点から活発に研究されるようになってきた。そこでは、「広義のポリティカル・エコノミーの概念を導入し、人間による資源利用の政治経済的側面に焦点を当て、マイクロないしローカルな文化・社会組織との機能的連関よりも、よりマクロないしグローバルな政治経済システムとの関係にまで視野を拡大」している（金沢 1999:225）。金沢は既存のポリティカル・エコロジー論のレビューを通して、当事者の相互作用に焦点を据える「アクター分析」、環境に係わる「政策・制度分析」、「言説分析」を、地元での資源利用の実態調査と総合させる必要性を述べている。さらに環境問題について環境破壊の連鎖性を考慮に入れることを主張している（金沢 1999:226-229）。

先住民に係わる資源問題の課題の一つが地球環境を破壊することなく、先住民とそれ以外の人々が社会生活を営む上で必要な資源を持続的に利用するための資源管理の方法を模索することであるとすると、金沢の主張は先住民の資源問題を考える上で、ひとつの指針を示している。先住民が直面する資源問題の解決を目指すためには、現地での先住民による資源の利用と管理の実態について現地調査を行い、ポリティカル・エコロジー論の視点から、(1)資源問題の発生とその原因、(2)資源問題の社会・経済的な諸影響および環境への諸影響、(3)資源問題に係わる動的な連環性を調査・研究することが不可欠であると言えよう。カナダ・イヌイットによる海洋資源の利用と管理について、ここで素描した視点から研究することが、筆者の次の課題である。

(*) 本研究の資料や情報は基盤研究(A)2・海外「先住民による海洋資源利用と管理」(研究代表者 岸上伸啓 課題番号11691053)の一部として、1999年9月17日から11月12日までの期間にカナダ国オタワ、モントリオール、クージュアック村、アクリヴィク村において収集された。モントリオールにおいてはマキヴィク調査部のStas Olpinski氏からマキヴィクの生物資源調査や管理についての話をうかがった。アク

リヴィック村ではAdamie Anautak、Adamie Alayco、Lukassie Qinuajuak、Johny Qaqutuk、Eli Aullalukの諸氏からシロイルカ猟について話を聞いた。また、Ainalik Alayco氏は2度、小型ボートによるシロイルカ猟へ筆者を同行させてくれた。これらの方々に感謝の微意を表すものである。本稿は2000年3月4日に開催された国立民族学博物館共同研究会「先住民による海洋資源利用と管理」(岸上伸啓代表)および同年5月20日に一橋大学で開催された日本民族学会第34回研究大会において報告した原稿を書き直したものである。その原稿に対し赤嶺淳氏(国立民族学博物館)とスチュアートヘンリ先生(昭和女子大学)から貴重なコメントを頂いた、記して感謝する次第である。

注

注1) シロイルカについては、生物学的な研究(Born et. al. 1994; Heide-Jorgensen et.al. 1998; Richard, P.R.et.al. 1998a, b; Hubbard et.al. 1999)、考古学やエスノヒストリー研究(Lucier and Vanstone 1995; Savelle 1995)、民俗知識(Huntington, et. al. 1999; Mymrin 1999)、狩猟の変化(Morseth 1997)、共同管理(Adams et.al. 1993; Richard and Pike 1993)などについての研究が近年、盛んに行われている。

注2) 遺伝子分析は、イヌイットのどの地域グループが、どのグループのシロイルカを捕獲しているかを確定するために実施されている。

注3) イヌイットが使用済みの乾電池、石油缶、プラスチック袋などをツンドラ上や海中に投棄することからの環境への悪影響も存在している(スチュアート 1992:81)。

注4) HFTAは各村に委員会があり、本部はクーージュアックのマキヴィック・ビルの中にある。主な役割はヌナヴィックのイヌイットに資源管理についての問題点を知らせることである。同委員会の決定事項は法的な権威性をもっていない。一方、狩猟・漁労・ワナ猟調整委員会(HFT Coordinating Committee)はカナダ連邦政府、ケベック州政府、クリー、ナスカピ、ヌナヴィック・イヌイットの代表からなり、年に4回、動植物資源の管理についてアドヴァイスをする。また同委員会はライセンス、調査許可、狩猟権を与える力を持つ。

注5) 1980年代の半ばから1993年頃まで、アクリヴィック村の村有大型ボートはハドソン湾の南方にあるリッチモンド湾まで約2週間遠征し、シロイルカ猟を行っていた(岸上 1993)。ガソリン代ほか経費がかさむため狩猟地はリッチモンド湾からイヴィヴィック村周辺へと変更になった。

注6) 1999年10月にはプヴンニツク村から来た2つのグループのうち1つは、ケープ・スミス島でキャンプ生活を送りながら、シロイルカ猟に従事していた。

注7) シロイルカのような大型動物を捕獲することは、1人前のハンターになった証となる。はじめてシロイルカを捕獲した若者は、シロイルカの頭部をまるごと、彼の助産人にプレゼントするために、プヴンニツク村へ持ち帰った。

注8) ハンター・サポート・プログラムとは、「ジェームズ湾および北ケベック協定」(James Bay and Northern Quebec Agreement)を締結した結果、ケベック州政府が1982年12月に法案83として制定したものである。そのプログラムの目的は、イヌイットの狩猟、漁労、ワナ猟など食料獲得活動を促進させ、長期的に維持させ、かつそのような活動から得られる産物をイヌイットに供給することを保障することであった。そのプログラムの資金の運用は、配分後は各村に任されており、村用の大型ボートや大型冷凍庫を購入したり、肉や魚を村のハンターや隣村から購入し、村人にそれらを無料で提供することが可能となった(岸上 1998b:32-33, 1998a, c)。

注9) イヌイットの人口が1265人あまりのウングアヴェ湾にあるクージュアックでは、1999年の初夏にある親子がカンギスク村の近くでシロイルカを2頭捕獲した。その親子は20センチメートル四方の大きさのみにマックを切り、村の全世帯へと分配したと言う。また、同年、学校の狩猟実習で子どもたちがシロイルカを1頭捕獲したが、それは同村の老人がいる40世帯へ分配したと言う。

注10) ヌナウトとグリーンランドの間にもシロイルカなど鯨類について同様な問題があり、国際協定がある(Richard and Pike 1993)。アラスカ北西部とカナダ西部極北地域の先住民の間で共同管理のための委員会(Adams, et.al. 1993)を創設しようとしたが、これは失敗した。

注11) グリーンランドやカナダ、アラスカのイヌイット、アラスカとロシアのユピックから構成されるイヌイット環極北会議(Inuit Circumpolar Conference 略称ICC)では、極北地域の自然環境の悪化とそのイヌイットの健康への悪影響を懸念して、その防止対策を世界の諸外国へ呼びかけている(Damas 1996:390-392)。詳しくはICCのホームページinuitcircumpolar.comを見られたい。

注12) 地域環境問題との関連で第三世界のポリティカル・エコノミー論を概観した金沢謙太郎は、「第三世界の環境や資源をめぐる問題は、今や同時に日本国内の問題でもある。それは、第三世界に対して何をするかという問いだけでなく、日本国内において何をするかという社会的・政治的な選択肢とも関わっている」(金沢 1999:224)と述べている。

注13) ポリティカル・エコロジー論については、Greenberg and Thomas (1994)、Bryant and Bailey(1997)、島田周平(1998)を読みたい。ポリティカル・エコロジー関係の専門誌としてJournal of Political Ecologyが1994年に米国にて発刊されている。

引用・参考文献

- Adams, M. et. al.
1993 Alaska and Inuvialuit Beluga Whale Committee (AIBWC) -An Initiative in "At Home Management" *Arctic* Vol.46(2):134-137.
- 赤嶺淳
1999 「地域を読む フィリピン南部住民の選択」『朝日新聞』（大阪本社版）
6月3日
- 秋道智彌
1997 「共有資源をめぐる相克と打開」福井勝義編 pp.165-187. 『環境の人類誌』（岩波講座 文化人類学 第2巻）岩波書店
1999 「海洋資源の共有」小柏葉子編 pp.99-126. 『太平洋島嶼と環境・資源』
東京：国際書院
- Ayotte, P. et al.
1995 Arctic Air Pollution and Human Health: What Effects Should be Expected? *The Science of the Total Environment*. 160/161:529-537.
- Barrie, L.A. et als.
1992 Arctic Contaminants: Sources, Occurrence and Pathways.
The Science of the Total Environment 122:1-74.
- Born, E.W., R. Dietz and R. R. Reeves (eds)
1994 Studies of White Whales (*Delphinapterus leucas*) and Narwhales (*Monodon monoceros*) in Greenland Adjacent Waters.
Meddelelser om Gronland: Bioscience. 39.
- Bryant R. L. and S. Bailey
1997 *Third World Political Ecology*. London and New York: Routledge.
- Canada
1999 *Summary of Northern Contaminants Program: Projects for 1999-2000*. Ottawa: Indian and Northern Affairs Canada
- Dahl, J.
1989 The Integrative and Cultural Role of Hunting and Subsistence in Greenland. *Études/Inuit/Studies*. Vol.13(1):23-42.
- Damas, D.
1995 The Arctic From Norse Contact to Modern Times.
In Trigger, B.G. and W.E. Washburn, eds., *The Cambridge History of the Native Peoples of the Americas*. Vol.1(2):329-399.
Cambridge: Cambridge University Press.
- Dewailly, E. et al.

- 1994 Exposure of Remote Maritime Populations to Coplanar PCBs. *Environmental Health Perspectives Supplements* 102(1):205-209.
- Egede, I.
 1995 Inuit Food and Inuit Health: Contaminants in Perspective. In: Research in the Arctic: Nutrition, Environment and Health Seminar in Nuuk - June 22-23, pp.1-3.
- Freeman, M.M.R. et al.
 1998 *Inuit, Whaling, and Sustainability*. Walnut, Creek: Altamira Press.
- Graburn, Nelson, H.H.
 1969 *Eskimos without Igloos: Social and Economic Development in Sugaluk*. Boston: Little, Brown and Company.
- Graves, J. and E. Hall
 1988 *Arctic Animals*. Yellowknife: Northwest Territories Renewable Resources.
- Greenberg, J.B. and T.K. Park
 1994 Political Ecology. *Journal of Political Ecology* Vol.1:1-12.
- 葉山アツコ
 1999 「熱帯林の憂鬱」秋道智彌編 pp.164-185. 『自然はだれのものか』（講座 人間と環境 1）京都：昭和堂
- Heide-Jorgensen, M.P. et.al.
 1998 Dive Patterns of Beluga (*Delphinapterus leucas*) in Waters Near Eastern Devon Island. *Arctic* Vol.51(1):17-26.
- Hubbard, J.D. , et. al.
 1999 Winter Sighting of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in Yakutat-Disenchantment Bay, Alaska. *Arctic* Vol.52(4):411-412.
- Huntington, H.P. et. al.
 2000 Traditional Knowledge of the Ecology of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in the Eastern Chukchi and Northern Bering Seas, Alaska. *Arctic* Vol.52(1):49-61.
- 井口泰泉
 1998 『環境ホルモンを考える』（岩波科学ライブラリー-63）東京：岩波書店
- Iwasaki-Goodman, M. and M.M.R. Freeman
 1994 Social and Cultural Significance of Whaling in Contemporary Japan: A Case Study of Small-Type Coastal Whaling.

In Burch, Jr., E.S and L.J. Ellanna, eds. pp.377-400., *Key Issues in Hunter-Gatherer Research*. Oxford: Berg.

金沢謙太郎

1999 「第三世界のポリティカル・エコロジー論と社会学的視点」『環境社会学研究』第5号 pp.224-231.

Kinoloch, D. et. al.

1992 Inuit Foods and Diet: A Preliminary Assessment of Benefits and Risks. *The Science of the Total Environment* No.122:247-278.

岸上伸啓

1993 「イヌイット社会における食物分配の一形式について」
菊池徹夫ほか編 pp.309-317. 『21世紀への考古学』雄山閣

1998a 『極北の民 カナダ・イヌイット』 東京：弘文堂

1998b 「ヌナヴィク・イヌイットのハンター・サポート・プログラムの運用と社会変化」『人文論究』（北海道教育大学函館人文学会）第66号 pp.27-41.

1998c Contemporary Inuit Food Sharing and Hunter Support Program of Nunavik, Canada

Paper read at the 8th International Conference on Hunting and Gathering Societies, National Museum of Ethnology, Osaka, Japan, October 27, 1998.

1999a 「先住民資源論序説：資源をめぐる人類学的研究の可能性について」
『人文論究』（北海道教育大学函館人文学会）第68号 pp.63-80.

1999b 「イヌイットの青年・中年男性の生業離れについて：カナダ・ヌナヴィクのアクリヴィク村の事例を中心に」『民博通信』第86号 pp.67-87.

Kuhnlein, H.V. et al.

1995 Arctic Indigenous Women Consume Greater than Acceptable Levels of Organochlorines. *Journal of Nutrition* 125 (10):2501-2510.

Lucier, C. and J. Vanstone

1993 Traditional Beluga Drives of the Inupiat of Kotzebue Sound Alaska. *Fieldiana: Anthropology*. (n.s.) No.25.

McGinn, A.P.

2000 「残留性有機汚染物質と闘う」レスター・R・ブラウン編著 pp.131-167. 『地球白書 2000-01』（浜中裕徳監訳）東京：ダイヤモンド社

Moffat, M.E.K., J.D. O'Neil and T.Y. Young

1994 Nutritional Patterns of Inuit in the Keewatin Region of Canada.

Arctic Medical Research 53 (suppl. 2):298-300.

Morseth, C.M.

- 1997 Twentieth-Century Changes in Beluga Whale Hunting and Butchering by the Kagigmiut of Buckland, Alaska. *Arctic* Vol.50(3):241-255.

Mymrin, N.I. et. al.

- 1998 Traditional Knowledge of the Ecology of Beluga Whales (*Delphinapterus leucas*) in the Northern Bering Sea, Chukotka, Russia. *Arctic* Vol.52(1):62-70.

Nuttall, M.

- 1998 *Protecting the Arctic: Indigenous Peoples and Cultural Survival*. The Netherlands: Harwood Academic Publishers.

O'Neil, J.D., B.Elias, and A. Yassi

- 1997 Poisoned Food: Cultural Resistance to the Contaminants Discourse in Nunavik. *Arctic Anthropology* Vol.34(1):29-40.

Peters, E. J.

- 1999 Native People and the Environmental Regime in the James Bay and Northern Quebec Agreement. *Arctic* Vol.52(4):395-410.

Peterson, Jr., J.H.

- 1993 Epilogue: Whales and Elephants as Cultural Symbols. *Arctic* Vol.46(2):172-174.

Reeves, Randall R.

- nd. *Belugas (White Whales) in Nunavik*. Kuujjuaq, P.Q.:Makivik.

Richard, P.R. and D. G. Pike

- 1993 Small Whale Co-management in the Eastern Canadian Arctic: A Case History and Analysis. *Arctic* Vol.46(2):138-143.

Richard., P.R. et. al.

- 1998a Sightings of Beluga and Other Marine Mammals in the North Water, Late March 1993. *Arctic* Vol 51(1):1-4.
- 1998b Fall Movements of Belugas (*Delphinaterus leucas*) with Satellite-linked Transmitters in Lancaster Sound, Jones Sound, and Northern Baffin Bay. *Arctic* Vol.51(1):5-16.

Sante Quebec

- 1995 *A Health Profile of the Inuit: Report of the Sante Quebec Survey among the Inuit of Nunavik, 1992*. Vol.3. Diet: A Health Determining Factor. Jette, M. ed. Montreal: Ministere de la Sante

et des Services Sociaux, Gouvernement du Quebec.

Savelle, J. M.

- 1995 An Ethnoarchaeological Investigation of Inuit Beluga Whale and Narwhal Harvesting. In McCartney, A.P. ed., pp.127-148., *Hunting Large Animals*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute.

Sergent, D.E.

- 1968 Whales. In Beals, C.S. ed. Vol.1:388-396. *Science, History and Hudson Bay*. Ottawa: Department of Energy, Mines and Resources.

島田周平

- 1998 「ナイジェリア農業研究の新しい地平 - ポリティカル・エコロジー論の可能性をめぐって」池野旬編 pp.1-29.『アフリカ農村変容とそのアクター』東京：アジア経済研究所

Smith, E.A. and J. McCarter eds.

- 1997 *Contested Arctic*. Seattle: University of Washington Press.

スチュアートヘンリ

- 1992 「定住と生業 - ネットリック・イヌイットの伝統的生業活動と食生活にみる継承と変化」北海道立北方民族博物館編 pp.75-85.『定住と移動（第6回北方民族文化シンポジウム報告』網走：財団法人北方文化振興協会

Thouez, J.P., A. Rannou and P. Foggin

- 1993 The Other Face of Development: Native Population, Health Status Indicators of Malnutrition - the Case of the Cree and Inuit of Northern Quebec. *Social Science and Medicine* 29:965-974.

Wein, E.E. et. al.

- 1996 Use of and Preference for Traditional Foods among the Belcher Island Inuit. *Arctic* Vol.49(3):256-264.

Wormworth, J.

- 1995 Toxins and Tradition: The Impact of Food-Chain Contamination on the Inuit of Northern Quebec. *Canadian Medical Association*. 152(8):1237-1240.

(国立民族学博物館 助教授)